



「最初でこそ、少数でこじんまりしていた城内も、日が経つにつれ、徐々に人が増えていきました。」

「いつの頃から、団長まで城内に腰を据えてしまった事もあり、幹部達も駐屯所よりも、旧本部にいる事が多くなつた。」

「駐屯所との往來を余儀なくされる事もあるが、それでも、どちらにも自室が与えられている分、気兼ねなく往復出来る。」

「人里離れた森に囲まれた城内は、日が落ちた途端、漆黒の闇と静寂が満ち、城から出る事さえ躊躇する程だった。」

「そのせいか、夕食時が一番賑やかなる城内で、一緒に食事していたハンジとナナバは、何気ない世間話に花を咲かせていた。」

「のんびり話を続けていた最中、唐突に黙考し始めたハンジに、ナナバは嘆息じみた吐息を吐き出していく。」

「頭の回転が速すぎるのも問題だが、談笑が出来るようになっただけ、浮上してきてるように思えた。」

「一時の廃人めいた姿を思えば、日に日に回復している」

「のが嬉しくて、軽く目を細めたナナバは、少し強めに背中を叩いた。」

「いつつうっ、くっそ痛つて〜っ!」

「反動でシチューに顔を突っ込みかけたハンジは、勢いよく顔を戻すと、涙目のままナナバを睨みつけていく。」

「何?なんで今、叩かれたの?」

「しかし、そんな光景でも、ただ笑うばかりのナナバに、ハンジの方も早々に怒る気力が萎んでいく。」

「余所事に気を取られていた自分も悪いが、背中がヒリヒリする程、強く叩かなくても、思考を戻せるのと思つてしまふ。」

「しかし、徐々に混んできた室内に急かされるように、食事を終えたハンジ達は、空の食器を片付けると、颯爽と食堂を後にしていく。」

「廊下に出る頃には、何事もなかったように、世間話も再開されており、その足で、各自の私室に向かい始めた。」

「別れ際に、『また明日』と言い合える幸せに、お互いに緩やかな笑みが零れ落ちた。」

駐屯所の自室よりは、狭めの個室だったが、持ち込んだ荷物は、早くも雪崩を起こし始めており、微妙な広さの違いなど、早々に分からなくなった。

しばらくの間、机上のランプの灯が揺れるのを眺めていたハンジは、徐に引き出しを開けると、何種類かの書類を取り出し始めた。

本来の業務時間は終わっているが、ハンジには、あまりその概念もなく、出来る暇があれば、時間帯は関係なかった。

次の壁外調査の詳細計画から始まり、巨人の実験まで、やりたい事や考える事が多すぎて、時間が足りない。

細かい計算は後回しで、大雑把に書きなぐった書き付けを書類に清書すると、インクを乾かすために、机の端へ追いやる。

そんな風に、いくつ目かの書類を作っていた時、扉をノックする音が聞こえた。

「開いてるよ〜」

顔を上げる事もなく応えたハンジは、資料を片手で押えたまま、束になった書き付けを漁っていた。

音もなく入室してくる人影に、振り向きもしないハンジは、時間帯から、訪問者の予想も付いていた。

圧倒される程の本の数は、初めて入室した者なら、驚嘆する所だが、今夜の来訪者には、見慣れた景色だった。

それよりも、駐屯所の自室ならばともかく、1週間前に割り当てられたばかりの部屋で、原型がなくなるまで、物を埋めるのは相当な技に思える。

まるで、おもちゃ箱をひっくり返したような部屋だとナナバは称したが、実際には、そんな可愛いものではない。

ハンジの部屋らしいと言えはらしいが、人を迎える部屋には到底向いていない。

あちこちで雪崩れている資料の山が、少ない足場を更に激減させており、何がゴミで何がメモなのか判断に悩む床を、うんざりしながら突き進んでいく。

「あれっ？コレじゃなかった…、こつちかな？エイツ！」
用が済んだメモは、丸めて適当に放り投げられるせいで、机の周囲は、絶えず紙クズが散乱している。

数日前に搜索した筈のゴミ箱は、今回も完全に空気が抜いだった。

足元に転がってきた紙屑を、嫌そうに見下ろしたりヴァイは、腹の底に響くような低音で話しかけて来る。

「この前、俺が発掘してやったゴミ箱はどこへやった？」

エレンならば凍りつくような殺気も、ハンジにとってはいつもの事ではなく、軽く背後を振り返っただけだった。

「やっぱり、リヴァイだった、いらつしやい」

ようやく、来客者の判別がついたハンジは、おぼろげな記憶を彷徨わせるが、明確な場所までは覚えていない。

「あの箱なら、…あの辺かなあ？」

「こっちか…」

指差された辺りを注意深く見渡したりヴァイは、本で蓋をされたゴミ箱を発見すると、怒りを通り越して呆れ返ってしまった。

上に載っている本を移動させると、中身が空っぽのゴミ箱が出てくる。

本来の役割を果たすべく、散らばっている紙屑をゴミ箱に詰め込んでいる中、新たに上から降ってきたゴミがリヴァイの頭を直撃していった。

後頭部に当たり、軌道が逸れた紙屑は、そのままリ

ヴァイの真横に転がって止まった。

後ろも見ずに放り投げるハンジが、狙ったわけではなく、偶然だったとしても、苛立ちが増幅したりヴァイは、自分を攻撃したゴミ屑を捻り潰した。

「オイ、クソメガネ！」

怒気を露わにさせながら背後に立つリヴァイに、資料に夢中のハンジからは、生返事しか返ってこない。

「ん？」

頭では無駄だと分かっているけど、毎回言いたくなってしまうのは、自分の労力を減らしたいからだだった。

「ゴミくらい決まった場所に捨てろ」

「あ、イイよ、後でまとめて処分するからさ」
本をめくついでに素っ気なく呟くハンジが、それを実行した事は、過去に1度もない。

だからこそ、余計に苛立ちが募るリヴァイだったが、必要以上に物事に没頭しようとするハンジは、異様さが増幅するばかりだった。

ようやく資料から目を離れたハンジは、新たな書類用の紙を探し始めたらしく、無頓着に机の上を掻き回し始める。

その度に、ギリギリの所まで追いやられていた本や、紙

の束が床に落下しても、ハンジにはそんな音さえ、耳に入っていない様子だった。

「あつた！」

目当ての物を引つ張り出し、ご機嫌で羽ペンを掴んだハンジが、新たな文章を記そうとした時、背後から伸びてきた手に止められた。

「え？なに？書けないんだけど？」

簡単には解けない程、力強く握られる手首に、ハンジはようやく思い出したように顔を上げていく。

物言いたげに見下ろしてくるリヴァイに、乾いた笑みを浮かべたハンジは、静かに羽ペンを机に戻すと、掴まれている右腕に反対側の手を重ねた。

そして、緩やかな仕草で後ろを向いたハンジは、歪な笑顔を張り付けたまま呟いた。

「どうしたの？」

のんびりした問いかけに、舌打ちを大きく鳴らしたりヴァイは、掴んでいた力を、徐々に緩め始めた。

「どうかしてるのは、お前の方だろ」

支える力がなくなり、するりとリヴァイの手から離れた手は、ポトツと音を鳴らしながら膝に落ちた。

力なく落ちてきた腕を見つめるように、顔を俯かせる

ハンジに、リヴァイは緩慢な溜め息を漏らしていく。

仕方がないと言いたげに、自分の方へ軽く引き寄せるリヴァイに、ハンジも大人しく凭れかかった。